オーラルヒストリー研究：アジア地域で活躍するグローバル人材に必要とされる「能力」について

岡山大学　全学教育・学生支援機構基幹教育センター　外国語教育部門　那須　雅子

日本国際教養学会第8回全国大会　ポスターセッション　（平成31年3月16日 ）

■研究の目的

オーラルヒストリーの手法を援用して外国語学習の成功者を対象にその学習履歴や体験に関するロ述インタビューを実施し、約40名のデータを蓄積した。本研究では、アジア地域において活躍しているグローバル人材に行った複数回にわたるインタビューに基づき、現代社会に必要とされる「能力」や「資質」の実態と、その習得方法について考察する。

■研究の背景

グローバル人材育成推進会議中間まとめ（2011）は、グローバル人材に求めるべき語学力水準について、「業務上の文書・会話レベル」といった中級レベルの裾野の拡大は着実に進捗しているものの、「二者間および多数者間折衝・交渉レベル」といった上級レベルの語学力を備えた人材の確保が極めて重要であると指摘した。折衝や交渉を実践するような高度な外国語を駆使できる人材の育成とは、果たして従来の外国語教育の枠組みの中で実践できるのであろうか。

■これまでのインタビュー実施（平成23年3月～平成31年2月）

対象者　41人

〇日本人　　36人

（社会人13人・大学（院）生17人・高専生1人・高校生1人・中学生4人）

・長期海外滞在歴のない方　16人

・長期海外滞在歴のある方　19人

〇その他　5人

・アメリカ人1人　日本語学習・日本長期在住

・中国人1人　日本語学習・日本長期在住

・韓国人1人　日本語学習・日本滞在歴なし

・タイ人1人　英語学習

・ドイツ人　1人日本語学習

オーラルヒストリー研究の利点

〇「成功者の声」

＊秀でた英語運用力を英語（外国語）学習を通じて身に付けた成功者の実体験を調査することにより、有益な学習法を明らかにする手がかりを得ることができる。

〇「長期的な視点」

＊オーラルヒストリーでは、長期間にわたるトータルな学習の軌跡を辿ることによって長期的学習を扱うことが可能である。

■時間軸を取り入れた質的研究による分析

等至性（Equifinality）とは、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）の根幹となる概念である。「複数の異なる径路を通ったとしても同じ到達点に達する」という考え方は、語学学習にもあてはまる。高度な英語力を習得することを到達点とみなし、学習経験を時間軸に描いて可視化することによって有益な学習法を詳細に解明する。今回は、複線径路等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling : TEM)を基に、K氏の履歴をまとめた。

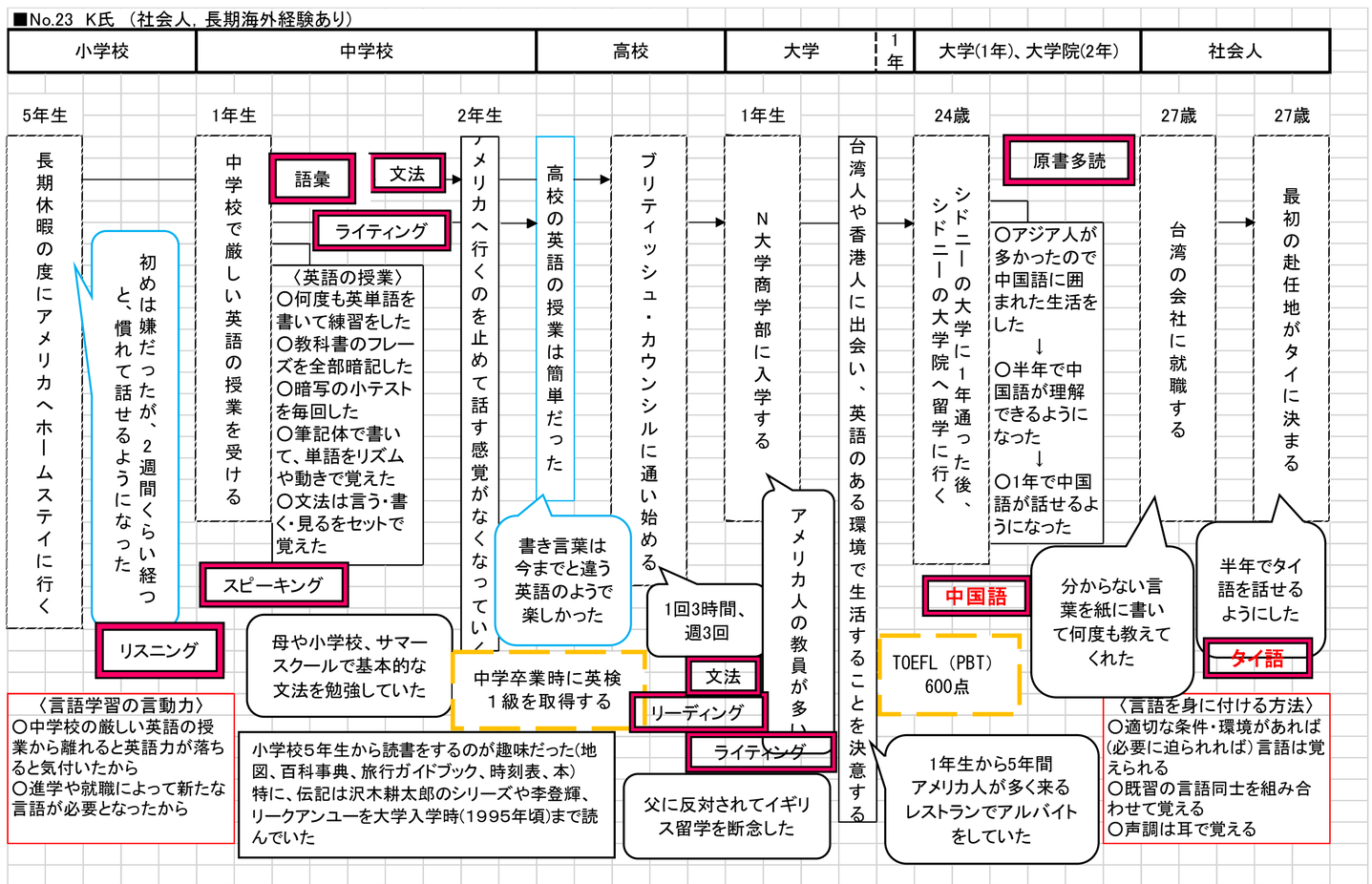
＜アジア地域で活躍するグローバル人材のインタビュー＞

海外において高い語学力を駆使して活躍しているK氏のインタビューを抽出した。K氏は、大学院修了後に、香港、台湾、タイなどアジア地域に複数の拠点を持ち、広くビジネス展開をしている企業で活躍している。これまで実施したインタビュー対象者の中で、最も詳細で豊富なインタビュー内容を含んでいる。K氏には2回のインタビューを行い、その合計時間は、8時間以上に及んだ。

●１回目のインタビュー（2012年2月28日実施）
外国語学習を中心に履歴や体験をインタビューした。

●2回目のインタビュー（2019年2月18日実施）
アジア地域でのビジネス展開に関する体験を中心にインタビューした。

●3回目（2019年2月19日）
K氏に教養と「読書」に関するインタビューを実施。



＜インタビューの抜粋＞　「読書」を通じて想像力を養った。

僕の場合は、地図や図鑑、百科事典の類を常に持ち歩く様な性質でした。行ったことない国でもそれらを見ながら、知らないなりにも色々と想像したりしたものです。お金がなくても、日常から離れた体験ができる。地図や百科事典の場所に思いを馳せ、その後、読書で知った情報を頭の中で立体的にして、それを海外で実際に確認したり、体験したりしていくような人生だった気がします。外国のことなら沢木耕太郎とか、中華系のことならマフィアを題材にした馳星周だとか、政治家や経済人の伝記も読みました。読んだ本とか地図とかの情報をパズルのように組み合わせて、色々想像してみましたよ。

＜インタビューの抜粋＞　「読書」から得た生きる力

僕が人生で一番衝撃というか、今でも一番大切にしているのは、シンガポール初代総理、リー・クアンユーの自伝や、彼が各種出版した本です。あとは台湾元総統の李登輝の自伝及び各種出版物、これもかなり読んでいます。小学3年生くらいからインターネットが普及するまでは読むことをずっと続けていました。李登輝、リー・クアンユーの人生に出会ったのは、記憶の上では 1988年、1989年頃でした。それを貪る様に読んだ記憶があり、その後に繋がるキッカケになりました。本から得られる衝撃というのは、一生を左右するくらいの力があると思います。

■考察

●国際社会で活かせる語学力とは、表層的スキルではなく人の心を動かせるコミュニケーション能力でなければならない。その語学力を支える教養的要素が重要性である。
●海外において国際的視野に立って交渉を行うための教養的要素の一つは、文化や歴史に関する豊富な知識とそれらを組み合わせる思考力である。
●「読書」を通じて、行動の原動力や語学習得への高い意識などを得られる。

■今後の課題

グローバル人材育成と教養教育の目指すべき共通の方向性を、語学教育の中に模索することの可能性を追求したい。高度なレベルの語学力習得を基盤として、豊かな教養に支えられた人材育成の実現を目標として研究の継続を行いたい。

キーワード：オーラルヒストリー、アジア地域、インタビュー、質的研究、教養教育、読書、複線径路等至性モデリング（TEM）、時間軸